様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月４日現在

機関番号：32694
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010 年度～2012 年度
課題番号：22720317
研究課題名（和文）　カサブランカの都市計画を中心とした植民地遺産の活用とその思想に関する研究
研究課題名（英文）　Research on Practical Use of Colonial Heritage and Thoughts behind Urban Planning in Casablanca
研究代表者
荒又　美陽（ARAMATA, Miyo）
恵泉女学園大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：60409810

研究成果の概要（和文）：
保護領時代のモロッコにおけるフランスの都市計画は、フランス本国の都市計画に大きな影響を与えるほど画期的であったことで知られる。本研究は、それを可能にした思想的背景とともに、現代モロッコにその都市計画が遺した影響を明らかにすることを目的としていた。カサブランカを主たる調査地とした歴史資料分析と現地調査を通じ、計画に携わった建築家たちが、現地の素材やデザインに愛着といえるほど強い関心を抱いていたことが見えてきた。現在、当時の建造物や街区が歴史的モニュメントとして保護の対象になってきている。独立以降、フランス統治時代の建造物は否定的な評価をされてきたが、近代建築保護の世界的運動の流れなども受け、市民団体を中心に、再評価の動きが作り出された。それらはモロッコの素材やデザインが強調される形で、「20 世紀モロッコ建築」という枠組みで観光資源としても活用されるように性格付けがされている。それは植民地遺産をモロッコの歴史の中で読み直していく仕組みでもある。

研究成果の概要（英文）：
French urban planning in Morocco during the protectorate period is known for having so innovative a character that it also had an influencing power in suzerain. This research aimed to clarify the background thought which made the planning possible, and the remaining consequences for present Morocco. Through an analysis of historical documents and field surveys, using Casablanca as the main investigation site, it can be said that French architects who engaged in the planning had a strong concern, or an attachment, with local materials and designs. Now the buildings and the areas from that time have become the target of protection as historical monuments. After independence, the buildings in the period of French rule were evaluated negatively, but there is now a movement of reevaluation, mainly led by an NGO, following a global movement of protection of modern architecture. Emphasizing Moroccan materials and designs, the buildings are reformed through the framework of “Moroccan architecture in the 20th century” and characterized as touristic resources. This may serve as a mechanism of rereading the colonial heritage of Moroccan history.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文地理学
科研費の分科・細目：人文地理学
キーワード：カサブランカ、フランス保護領、植民地遺産、都市計画

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、一貫して現代フランスの都市計画事業とその背後にある思想を研究してきた。主な調査地はパリであり、新規の景観や歴史的街区の保存が、いかなる社会的・時代的背景をもって創造され、受容されたかを明らかにしてきた。

研究の中で、歴史的街区として 1960 年代に保存されたマレ地区保存事業に第二次大戦以前からかかわっていた建築家が、常にモロッコでの都市計画の体験に言及していることに気づいた。調べていくと、戦間期のパリの都市計画において重要な役割を果たした建築家の多くが、保護領時代のモロッコにおける都市計画事業に携わっていたことが見えてきた。

しかし、モロッコの都市計画事業とパリの都市計画事業は、必ずしも結びつけて考えられることがない。また、現在のモロッコの都市計画におけるフランス統治の影響についても、研究が不足している。そこで、モロッコにおけるフランスの都市計画事業の歴史とその現在までの影響についての考察が必要であると考え、研究を開始した。

２．研究の目的

フランス保護領時代（1912 - 1956）のモロッコの都市計画において、もっとも挑戦的で、かつ困難に直面したカサブランカの都市計画事業の歴史と現状を明らかにし、モロッコにおけるフランス統治の物理的・思想的遺産が、現在の都市構造・都市社会に与えている影響について考察することが本研究の目的である。

カサブランカは、20 世紀に入り、ヨーロッパとの接触が大きくなることによって発達した都市である。大西洋に面したその都市は、フランスにとって保護領統治の政治的・経済的な拠点であった。そのため、フランスの介入がよく理解できる都市計画が行われた一方、都市の急速な拡大に対処しきれず、住宅不足や衛生設備の不備などの問題にも直面することになった。

旧市街、ヨーロッパ人のための新市街、現地人のための新市街に分けられた都市構造は、現在も明瞭に残されている。旧ヨーロッパ人地区の建物の中には整備され、観光に用いられているものもある。本研究は、現在のカサブランカにおけるその功罪を明らかにしていく。

３．研究の方法

現地調査と資料分析による。

保護領時代のモロッコについては、国立資料館の地図収集庫、フランス建築協会の資料館にあるアルベール・ラプラド、オーギュスト・カデの資料を閲覧、収集、分析した。さらに、現地調査から見えてきた重要イベントについて、アラブ世界研究所の図書館で資料収集を行った。パリでの資料収集については、井形和正氏の協力も仰いだ。

現在のカサブランカについては、カサブランカ都市計画局、モロッコ文化省、現在の整備担当建築家、NPO 団体カザメモワールを訪問し、資料収集とともにインタビューを行い、分析を行った。カサブランカでの調査については、JICA モロッコ事務所及び三田村哲哉氏の協力も仰いだ。

また、カザメモワールが年に１度行っているイベント「カサブランカ文化遺産の日」に参加し、参加者の様子や人数、ボランティアの人々の様子などを観察した。

その他、毎年 1－2 回の研究会、国際学会において評価を仰ぎ、研究の方向性について調整を行った。

４．研究成果

研究期間を通じ、パリで三度、カサブランカで二度の現地調査・資料収集・インタビューを行うことができた。その結果を踏まえた本研究の成果は、以下のとおり。

１）ヨーロッパ人と非ヨーロッパ人を視覚的に区分する都市計画を立てたアンリ・プロストは、ミュゼ・ソシアルという社会改革団体の衛生部会に属していたことがあり、カサブランカの都市計画においても、関心は衛生問題であった。居住地と工業地帯のゾーニングは、風向や土壌をもとに決められている。ヨーロッパ人と非ヨーロッパ人の区分も衛生主義的な判断が働いたものと考えられる。

２）カサブランカの都市計画の中で、実際の建築デザインに携わった建築家たちは、現地の建築やデザインに強い関心を持っていた。行政地区に建設された市役所や裁判所、銀行などは、当時のヨーロッパの流行であるアール・デコ様式の中に、モロッコのタイルやしっくいの彫刻、鉄工芸、木工技術を取り入れている。

３）その顕著な例がハッブース地区である。非ヨーロッパ人の地区として、新しく設計された地区である。ヨーロッパ人との接触を可

能な限り少なくするためのゾーニングや、モロッコのデザインを用いるというアイディアまではプロストによるが、その具体的な計画を立てたのはプロストの下で仕事をしていたアルベール・ラプラドである。彼は、その設計がいかに心躍るものであったのかについて書き残している。ただし、実際に事業に携わったのは、さらにその部下であるエドモン・ブリオンとオーギュスト・カデである。後者はハッブース地区に住み、生涯設計に携わった。

４）Rachik(2002)によれば、カサブランカの都市計画は、大きく三つの段階に分けられる。保護領初期のプロストによる都市計画ののち、独立直前にミシェル・エコシャールによるビドンヴィル解消を目的とした都市計画があり、さらに 1980 年代以降の住宅建設があったという。都市計画は、いつも治安維持と関連しており、カサブランカ都市計画局は内務省の管轄である。

５）現在は、そこにさらなる展開が起きていると考えられる。都市中心部にトラムを通すなどの観光化を目的とした都市計画が行われているのである。プロスト時代に作られた建造物は、そこでは観光資源となっていく可能性がある。

６）ハッブース地区は、観光目的地として整備計画が立てられている。同地区は王宮に近接しており、カサブランカの中できわめて整った特殊な地区であり続けている。しかし、大型バスを止める場所がないなど、観光地としては困難を抱えている。担当建築家であったエル・ハリリ氏は、ドコモモのモロッコ代表であり、近代建築保護の世界的な流れとの関係も深いとみられる。

７）「ハッブース」とはイスラムのワクフ、すなわち宗教的な所有権の停止の考え方からきている地名である。フランスは、その制度を植民地行政の枠組みでとらえなおし、必ずしも宗教的な意味を持たなくとも、現地の人々の利益になることに使う財源として利用してきた。ハッブース地区もその考え方の中で作られた地区である。現在のモロッコの行政にもハッブース省はあり、地区は特別な制度の中で保護されてきたため、現在まで維持されてきた。他方、王宮の拡大に伴って解体された一角もあり、その裁量の度合いはさらなる調査を必要とする。

８）プロスト時代の建造物の見直しの背後には、市民団体カザメモワールによる精力的な活動がある。1995 年に発足したこの団体は、カサブランカ中心部の建造物の調査を行い、建設年、建築家、特徴などについてまとめ、建築ガイドなどを作成している。また、2009 年からは、多くの団体の協賛を得ながら、「カサブランカ文化遺産の日」というイベントを行い、建築の価値を市民に知ってもらう活動もしている。

９）カサブランカ文化遺産の日は、4 月の週末に行われている。学校単位での建築ツアーに加え、週末には市民が多くの施設を訪問し、そこで建築についての説明を聞くことができるようにしている。また、関連カンファレンスも数多く開かれており、学術的な関心にも答えられる行事になっている。

このイベントは、多くの市民ボランティアによって支えられている。第 4 回カサブランカ文化遺産の日においては、ボランティアは「私の文化遺産のためのボランティア」と書かれたそろいの T シャツを着ていた。「私たち」と複数形で書かれているのではなく、「私の」となっていることによって、国や権力から強制されたのではなく、自分が自由意思でそこにかかわっていることを強調する効果を持っていた。彼らは非常に熱心であり、聞く方の熱意と併せて、大変活発なイベントであるといえる。

１０）一つ一つの建築は、それを設計したフランス人建築家などよりは、細かなデザインに用いられたモロッコ性を強調する形で説明された。モザイクや木工の美しさ、漆喰細工や瓦がどこの職人によってつくられたかなど。それは、植民地遺産としてではなく、自分たちのものとして建造物を捉えなおす試みとみることができるだろう。

１１）市民の動きを追うように、文化省は保護領時代の建築のいくつかについて、「20 世紀モロッコ建築」という枠組みで歴史的モニュメント登録をしている。カサブランカの建造物はモロッコ全体の登録歴史的モニュメントのかなりの割合を占めている。そのすべてが、2003 年から 2006 年の間に登録されており、最初の二年がほとんどを占めることからも、カザメモワールの活動の成果が大きいと考えられる。

１２）カサブランカにおける植民地遺産の活用は、日本の「近代化遺産」保護と同様、世界的な近代建築保護や産業遺産保護の流れと軌を一にしている。カザメモワールの活動は国際的に活躍しているエリート層が率いており、広い視野から始まったものと考えられる。他方で、政府も含め、それを植民地遺産としてではなく、モロッコの建築として積極的に読みなおそうとしていることは注目に値する。保護領の首都として設計されたラ

バトの世界遺産化などにもみられるように、モロッコはフランス統治時代の遺産を積極的に利用することによって、それらを自らのうちに取り込もうとしていると考えられる。

本研究について残された課題のうち、解決困難な課題としては、資料があくまでもフランス側およびフランス語のものに限定されているということである。宗主国寄り、権力者寄りの見解になるのではないかという指摘は甘んじて受けるよりないが、中立的であることを意識しつつ、植民地支配を受けた他の地域との違いの中でモロッコの特徴を描き出すことに代えたい。

この研究に関して、三度の国際学会において発表の機会を得た。すでに終わった二度の学会では好評を得ている。他方、論文については、調査報告として短いものを『都市地理学』に書いたにとどまっており、引き続き取り組んでいく。国際学会でコメントをくれた方々にも渡し易いよう、まずは英文誌への投稿を準備中である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
平成 24 年度
荒又美陽「カサブランカ―フランス保護領時代の遺産をめぐって」『都市地理学』no.7、pp.90-95、日本都市地理学会

〔学会発表〕（計５件）
平成 22 年度
ARAMATA, Miyo, *"Colonial City Planning" in Suzerain: Interest in Autochthonous Features and the Formation of a Historic District in France* 国際地理学会地域カンファレンス（IGU Regional Conference, Tel Aviv）（於：ダン・パノラマ・ホテル、テルアヴィヴ、イスラエル）2010 年 7 月

平成 23 年度
荒又美陽「フランス植民都市建設とその遺産をめぐって―カサブランカを例に」2012 年 2 月　筑波大学人文地理学談話会　於：筑波大学総合研究棟 A 棟 111（招待講演）

平成 24 年度
地中海学会シンポジウム「海の道―航路・文化・交流」パネラー（荒又美陽・亀長洋子・武田尚子・尹芝惠)、2012 年 6 月　於：しまなみ交流館（尾道市）（招待講演）

ARAMATA, Miyo, *Colonial Heritage and Tourism: Restructuring Memories of French Rule in Casablanca*、国際歴史地理学会（International Conference of Historical Geographers）（於：チャールズ大学、プラハ、チェコ）2012 年 8 月

平成 25 年度（予定）
ARAMATA, Miyo, *The Formation of Cultural Identities through Colonial Urban Planning: Rediscovering Historicity in France and Morocco*、国際地理学会地域カンファレンス（IGU Regional Conference, Kyoto）（於：国立京都国際会館、京都）2013 年 8 月

６．研究組織
(1)研究代表者
荒又　美陽（ARAMATA MIYO）
恵泉女学園大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：60409810

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし